

東条川疎水ネットワーク博物館関係

郷土史ブログ

「ふるさと加東の歴史再発見」より

東条ダム、嬉野台地の開発、昭和池、サイフォン関連



兵庫県議会議員

藤 本 百 男

県政資料

ふるさと加東の歴史再発見シリーズ I

東条川疎水ネットワーク博物館関係

郷土史ブログ

「ふるさと加東の歴史再発見」より

東条ダム、嬉野台地の開発、昭和池、サイフォン関連

兵庫県議会議員

藤 本 百 男

目次

① ブログ「百聞百見」より

東条川疎水ネットワーク博物館関連	1
------------------------	---

② ブログ「ふるさと加東の歴史再発見」より

① 東条ダムと用水路	7
② 昭和池と嬉野台地の開発	37

③ 兵庫県議会での関連質問記録

53

まえがき

この「県政資料」は、私の議員活動ブログ「百聞百見」、歴史ブログ「ふるさと加東の歴史再発見」に投稿してきたものの中から、テーマにしたがって、県議会の本会議や委員会などで質問したものをを選び、まとめたものです。

第Ⅰ集は、疎水百選に選定されてから10周年を迎える東条川疎水について、現在北播磨県民局が進めている「東条川疎水ネットワーク博物館構想」に関係するものをまとめました。

ふるさと加東、北播磨、そして兵庫県の良さを再認識するとともに、地域課題を解決していくための資料として活用していただければ幸いです。

平成27年3月吉日

兵庫県議会議員

藤 本 百 男

「百聞百見」より

疎水フォーラム

2010年07月07日



5日(日)午後、「疎水フォーラムinひょうご2010」が県公館で開かれた。「会場がこれほど満員となったのは久しぶり」という井戸知事の言葉の通り、会場

は県内外からの出席者で満員だった。私も教員時代から関心を持っていた分野だったので楽しみにしていた。

オープニングは県立農業高校演劇部の女子生徒による演劇、「水を求めて―過去から未来へつなぐ思い―」が披露された。ため池研究会の生徒の会話を通して、ため池や疎水の価値に目覚めるといった内容だったが、その内容もよかったが、それ以上に演技力に関心した。

第一部は「水ネットワークの再発見」をテーマに鼎談が行われた。まず、「疎水」という言葉には、「用水」という機能的な意味以上

に文化の香りがするというとらえ方、すなわち、共生文化としての疎水、歴史の継承や日本の原風景としての疎水といった内容の話が、織作さんの写真とともに展開され、非常に奥深い鼎談だった。

第二部は「循環する水の路」と題した映像を視聴した。いなみの台地のため池、御坂サイフォン、水路、頭首工、分水筒など田園風景の中にとけ込んでいるこうした疎水の多様な姿が描かれていた。映像に続き、池本廣希兵庫大学教授の司会で、作家の玉岡かおるさんの講演、児童の読書感想文（「水をもとめて」）の表彰と朗読、そして南埜猛兵庫教育大学准教授の講演が行われた。

南埜先生は、私が兵庫教育大学附属中学校に勤務していた頃から地域学習等でご指導いただいていたこともあり、関心をもって聞かせていただいた。「疎水とため池～いなみ野の水利システムの今昔」の題で、世界的にも珍しい水利システムである疎水とため池の取り合わせを詳しいデータ、地図等で説明していただいた。その価値をもっと私たち自身が知ること、そして、子どもたちにも伝えていくことが過去と現代、そして未来をつなぐことになる、ということだったが、まさに共感する内容だった。

29年前、創立2年目の兵庫教育大学附属小学校に勤務していた当時、私は4年生の社会科を担当していた。副校長だった長岡文雄先生（初志の会）のご指導で「東条ダムと嬉野開発」の単元づくりに取り組んだ。その調査のために、東条ダム（鴨川ダム）と東条川用水の水路を単車で見てまわった。ダム、谷を渡る水路、サイフォン、隧道、分水筒等、どこまでも延びる水の路の魅力にとりつかれてしまった。昭和初期に造られた昭和池、その水路、サイフォンの呑口、吐口の施設なども調査した。その過程で、ダムの湖底に沈んだ土井部落の藤原さんや、嬉野台地の開発にあた

った平川さんらとの出会いから、先人の苦労も知った。台地の水路に遙か山の向こうの東条ダムの水が勢いよく噴き出し、その水の先端を走って追いかける子どもの姿は今でも鮮明に残っている。そうしたことを思い出しながらのフォーラムだった。

公館の会場通路には疎水百選の東条川用水を紹介するパネル写真が掲げてあった。東播土地改良区の小池敏理事長は、建設中の鴨川ダムの写真を見ながら、懐かしそうに子どもの頃の思い出を語って下さった。

この写真パネルを使って地域の小学校で子ども達が学習できたらなと思った。

未来へ伝えたい貴重な遺産。そして、今私たちがそのために価値を再認識し、しっかり保守していかなければならない。その思いを強くした。

東条川疎水ネットワーク博物館

2013年03月06日

午後、県の社総合庁舎で、東条川疎水ネットワーク博物館構想の会議が開かれ出席した。私自身この疎水ネットワーク構想には思い入れも強く、鴨川ダム、昭和池、水路、ため池、田圃とつながる水の壮大なネットワークこそ地域の貴重な歴史産業遺産だと唱え続けてきた。

その元を辿れば、昭和56年、嬉野の兵教大附属小で社会科教師としてダムと台地の開発という教材づくりのために水路網、水の道を追って取材し回ったことが原点だった。社会科教師として

の原点であり、郷土史研究のフィールドワークの原点でもあった。あらためて地域の貴重な資源、歴史遺産として見直し、次代にその価値を伝えていこうというこの事業の推進に取り組んでいきたい。

東条川疎水ネットワーク博物館

2014年06月01日



東条湖畔のアクア東条へ。今日は朝から東条川疎水ネットワーク博物館の「鯉の里がえりツアー」が実施され、午後2時からアクア東条でまとめの会が開かれる予定だったが、少し遅れて到着、ワークショップが始まり、終わったのは5時前だった。

参加したのは、兵庫教育大学、神戸芸術工科大学、神戸大学の学生ら約50人。大学生が東条川疎水を学ぶという企画だ。一行は、段ボールで作ったとは思えない立派な「鯉」を担いでダムからアクア東条へやってきた。素晴らしい作品だ。その後、今日の見学を通して東条川疎水の印象や課題についてグループで話し合い、発表した。初めて知った疎水、施設に驚いた、豊かな自然の良さを知ったなどの感想とともにもっと知ってもらうための提案も行われた。曾根サイフォンを鯉のアートで包む、鯉のぼりをつけて谷を飾る、といった目立つイベントで多くの人に知って貰い

たいという願いもあった。疎水施設と芸術という若い学生の感性が新鮮だった。

北播磨県民局（加古川流域土地改良事務所）が主となって進めているこの東条川疎水ネットワーク博物館構想は、ダムと用水路、ため池、田圃をつなぐ壮大な水のネットワークシステムとその地域の歴史や自然、人々の暮らしなどを疎水文化として価値を見直し、発信していくことによって、みんなの貴重な歴史、産業遺産として大切に維持して未来に伝えていこうという趣旨の取り組みだ。私自身、教師時代に地域学習の題材として、東条ダム・昭和池などの巨大貯水池の築造と台地の開発の单元づくりのために用水路網を調査してその壮大さ、物語に魅了された思いがある。老朽化した用水路やため池の維持管理、補修は単に農業施設ということではなく、この地域の人々の暮らし、文化、自然を守るという大切な事業だということをみんなに知ってもらいたい、という思いがあった。そうした中でこの疎水ネットワーク博物館構想の取り組みが始まり、ハード、ソフト両面から推進されている。特に小学生や地域住民の学習会、聞き取り調査などソフト面での地道な取り組みが進められていることを評価したい。

東条川疎水トーク

2014年11月24日

午後3時過ぎ、小野市の下東条コミセンで開催された東条川疎水ネットワーク博物館の「東条川疎水トークライブ&カフェ」に出席した。水利の専門家をはじめ、郷土史、地域文化、大学生



などネットワークに参加している様々な立場から、東条川疎水への思いやネットワークの今後の展開について話し合った。日が暮れる頃、LEDの点灯が行われた。来年は疎水百選に選定されて10周年を迎える。



「ふるさと加東の歴史再発見」より

① 東条ダムと用水路

満水の東条湖－疎水文化を学ぶ

2014年06月04日



加東市内の田圃に水が引かれ、一部では田植えが始まっています。

兵庫の米どころである播州平野、そして、「酒米の王様」として知られる山田錦のふるさと加東、北播磨の水瓶、東

条ダムは今、満水です（写真）。

戦後国内第1号の国営ダムとして東条川へ注ぐ鴨川をせき止めて築造された鴨川ダム（東条ダム）。この巨大な貯水池から、加東市、小野市域の広大な農地へ、張りめぐらされた水路網を通して米作りの命の水が送られています。水路橋やサイフォンで谷を渡り、隧道で山をくぐり、ポンプアップで台地に上げられ、ため池に貯えられ、田圃に引かれます。壮大な水のネットワークが築かれているのです。

この地域の農業を支えてきた水のネットワーク、東条川流域の豊かな自然、歴史、文化を育んできたのもこの水のネットワークであり、これを疎水文化と呼び、一体とした博物館とみなしていこうというのが東条川疎水ネットワーク博物館構想です。北播磨県民局（加古川流域土地改良事務所）が中心となって、流域の諸団体、グループが参加してこの貴重な施設、文化、歴史を学び、価値を発信していこうと取り組みが進められています。

その一環として、県内の大学生が実際に現地を歩いて学ぼうという「東条川疎水ネットワーク博物館「鯉の里がえりツアー」という企画が実施されました。



参加したのは、兵庫教育大学、神戸芸術工科大学、神戸大学の学生ら約50人です。私は東条湖畔のアクア東条で一行を待ちました。

写真の鯉は学生が作成した段ボールの鯉で、ダムからアクア東条まで学生らが担いで運んできたものです。生きているように見えるのが不思議でした。アクア東条に展示されている特産の播州鯉と並びました。

渇水の東条湖夕景

2008年09月11日

先日、神戸新聞が「東播の水がめ」東条湖の貯水量が満水の30%にまで下がっていると報じました。

今年は各地でゲリラ豪雨が話題になっていますが、台風の上陸



もなく、ダム上流域の降水量が少ないために水位が下がっているということです。

稲の収穫時期を迎えて、台風は困ります。しかし、生活用水確保のためには雨も必要

です。

9日の夕方、友人とダムに行ってみました。ダムの近くまで行くと、垂直に切り立った岩壁の下の方まで水位が下がって、あらためて谷の深さを実感しました。

写真はダム（堰堤）から西を望んだ景色です。澄んだ秋の空気を通して、湖面は西に傾いた陽に輝き、右手の岩壁の上には、水天宮の祠が見えました。

ダムから六甲を望む

2008年09月12日



昨日は、潟水の東条湖の美しい夕景を紹介しましたが、振り返って、ダム（堰堤）から東を望むと澄んだ空気の向こうに遠く六甲連山が青くくっきりと見えました。

私が立っているダムの上は標高140メートル余り。ダムの高さは40メートル余り。直下を見下ろすと平衡感覚が揺らぎます。ダムから鴨川が田園の中をくねり、東条川に流れ込こみます。川沿いには田圃が少し色づき、

その向こうに低く丘陵が横たわって、六甲山系まで広々とした景色を見せてくれます。

一緒に訪れた友人と、小学生の頃ボーイスカウトで飯ごう炊さんをしたのは確かこのダムサイトに近い所だったなあ、などと話しながら当時の記憶をたぐってみました。そこで気が付いたことは、二人ともほとんどここまで足を運ぶこともなく40余年の歳月が流れていたということでした。

これから秋の澄んだ空気と紅葉の季節。ぜひこのダムからの絶景を楽しんで下さい。

冬の東条湖

2011年01月31日



30日(日)、寒波のために凍えるように冷たく、しかし、乾いて透明な空気の中、加東市内を車で走っていると、冬の日射しに山や湖の景色が輝いていました。

東条湖畔の道路から青い湖面が見えます。アクア東条の駐車場に車を止めて、堰堤の方に向けてシャッターを押しました。水位はだいぶ下がっています。ケーブルテレビでは、加東市の水道の水源であるダムの貯水率が40%に下がっている所以で節水を呼びかけています。60余年前の終戦直後に食糧増産のために建設されたこの鴨川ダム。関西の秘境、東条湖は観光地として栄えてきました。湖上をすべる白鳥の遊覧船はそのシンボルでした。夏にはこの湖面に大きな花火が

美しく開きます。今、冬の日には湖面が光っていました。

懐かしの東条湖空中写真

2012年08月03日



8月1日の夜、東条湖（加東市）では大花火大会が行われました。豊かな水を湛える東条湖の夜空と湖面に色とりどりの大輪の花火が映えました。

さて、この東条湖は鴨川をせき止めて造られた戦後第一号の国営鴨川ダムによってできた湖です。この歴史ブログでもその建設経緯、湖底に沈んだ土井部落の立ち退きなどの話を掲載してきました。今日はその東条湖が建設され、関西の仙境、奥座敷としての観光開発が行われる初期の東条湖の空中写真を紹介します。東条湖観光に関係した方から提供を受けた写真です。（注：故埜尻善之氏）

手前の湖とダム堰堤、水天宮。ダムの向こうに広がる緑の田園と丘陵。鴨川の流れと東条川の流れが木々の連続により見分けることができます。道路に沿って集落が点在しているのも見渡せます。今と比較すると大きな建造物がなく、のどかな田園の町東条町の風景があります。

「天恵の地形、土井は池になる」といわれた地形の特徴がこの空中写真でよくわかります。

懐かしの東条湖空中写真—その2

2012年08月06日



東条湖の空中写真をもう一枚紹介します。これも前回の写真の持ち主から提供を受けたものですが、東条湖をさらに広く見渡すことができます。東条湖はその形から「雲龍湖」という名にしようという話も

あったとか。また、観光地としての東条湖には、東条湖八景（水天宮、不動岩、妹背岩、屏風岩、五ヶ所溪谷、鞍馬峽、鷺の巣窟、蓬萊峽）が名付けられ、観光船で湖上を巡ったのでした。まさに関西の仙境という名にふさわしい観光地でした。

昭和56年—東条ダム

2012年05月19日



昭和56年（1981）、創立2年目を迎えた兵庫教育大学附属小学校の新校舎（現校舎）が嬉野の旧社中学校跡地に新築され、それまでの元公民研修所の仮校舎から真新

しい校舎に移りました。それから30年余りが経ちました。私は、その年に加古川市の小学校から附属小に異動し、4年生の社会科と国語科を担当しました。

4年生の社会科で、「嬉野台地の開発と東条ダム」という学習

単元の開発に取り組みました。そのために毎日のようにダムをはじめ、水路や池などを取材してまわりましたが、50ccのスズキの単車で山の中の水路を追って走り回りまわったことを懐かしく思い出します。

今日紹介する写真は、そのうちの一枚で、東条ダムを下流から見たものです。このダムから水路がのびて谷を水路橋で渡り、山中はトンネルで抜け、さらに向こうの谷へは巨大なサイフォンで駆け上がる。そして、各所で分水され池に、田圃へと水が流れていく。そのダイナミズムに取り憑かれたように走り回りました。

東条川疎水―谷を渡る曾根サイフォンの威容

2014年12月08日



この写真は、加東市松沢の東条川のすぐ近くを通る道路の上を通っている曾根サイフォンの水管橋です。

今日、松沢の大深山東福寺で弁財天祭りが行われるので寺に向かう道を走っていると、

この水管橋の下をくぐります。

この巨大なパイプ、水管橋は東条ダム（鴨川ダム）から送られてきた用水を東条川の谷を逆サイフォンで渡って小野市域に送るための施設なのです。加東市側の呑口の標高は44.8メートル。吐口側は37.0メートルでこの7.4メートルの落差で水がサイフォンの原理で低い川を水管を通して台地に噴き出すしくみです。長さは1000メートルを超え、日本でも最長クラスだと言われ

ています。すごいですね。その威容に圧倒されます。

東条川疎水ネットワーク博物館の道標－依藤野

2014年02月27日



加東市のほぼ中心に広がる台地、嬉野台地の東部は依藤野とよばれています。兵庫教育大学の附属小に勤務していた昭和56年に「東条ダムと台地の開発」という授業づくりに取り組んだ時、依藤野の

松田さんから開拓当時の苦労話をお聞きしたことがありました。ダムからの水をポンプアップして台地に上げ、水路を通して田圃に水を入れることができたのです。

その依藤野の公民館前の交差点に東条川疎水ネットワーク博物館の道標が立っています。この博物館は東条川疎水のダムと水路と池と田の壮大な水のネットワークを博物館に見立てたもので、台地に張り巡らされた用水路の目印になっています。



東条ダムへ－大川瀬導水路取入口

2010年07月19日

東条ダム（鴨川ダム）へは、上流の大川瀬から水が取り入れられています。29年前に水源を辿って、大川瀬の取入

口までバイクで行ってみました。

ものすごい岩壁の下に大川瀬導水路取入口があります。取水堰は幅約4.5メートル、高さ約3.5メートルあります。ここからダムまでは約5キロメートルの水の旅が始まります。隧道を3キロ、開渠部分を2キロ、そしてまた隧道を300メートルという旅です。

東条ダム―水の旅の始まり

2010年07月16日



東条ダム（鴨川ダム）からの用水は、血管のように延びる水路を通して、加東、小野市域の広大な農地に送られています。その水の旅の始まりが写真のゲートなのです。

ダム堰堤の下の見下ろすところに水路の出発点があります。はじめは暗い隧道の中ですが、やがて開渠に出て、谷を水路橋で渡り、山裾を縫うように走り、またポンプアップで台地へ引き上げられ、あるいはサイフォンで大きな谷を渡ります。その長い水の旅の始まりがこのゲートなのです。ただし、この写真は29年前の調査で撮影したのですが、今も変わらぬ姿であるのでしょうか。

東条川疎水―谷を渡る水路橋

2010年07月08日

29年前に撮影した東条川用水の鴨川ダムから延びる国営の幹



線水路が谷を渡る水路橋です。

加東市黒谷のダムへ通じる道路から見えるのですが、ダムから出発した水の旅のはじめの頃にこの水路橋を渡ることになります。

東条ダムの水—水路橋を流れる

2010年07月21日



東条ダム（鴨川ダム）から長い水の旅に出た水は、第一号幹線水路を流れます。この歴史ブログの7月8日投稿の記事で、ダム近くの加東市黒谷を通る県道から見た水路橋の写真を紹介しましたが、その水路橋を上から眺めたのが今日のこの写真です。全長62メートルの長い水路橋です。普段は下からしか見ることができません。高い橋の上をダム

の水がゆったりと流れているのです。

29年前に撮影した東条ダムの水の流れの一枚です。

東条ダムの水の旅—山中を縫うように

2010年07月22日

東条ダム（鴨川ダム）から延びた水路はダムのすぐ下の水門から長い旅に出ます。水路橋（昨日紹介）を渡り、山裾を縫うようにゆっくりと流れていきます。今日は山裾を流れる第一号幹線水



路の風景を紹介します。

29年前に社会科の教材づくりのために水路を追って調査をした時に撮影したものです。山裾を静かにカーブしながら流れる水路。やがて、台地にポンプアップされたり、サイフォンで谷を渡ったり、池に入って、さらに流れて、分水されて田を潤す水の旅。まだ心臓であるダムから出たばかりの大動脈を流れている風景です。

東条ダムからの水の旅—山中の分流点

2010年07月15日



東条ダム（鴨川ダム）からの幹線水路は、谷を水路橋で渡り、隧道でくぐり抜け、山すそを曲がりくねりながら延びています。その水路を辿っていくと、やがて、安政池（加

東市松沢）の東側の地点で二股に分かれます。一方は嬉野台地から曾根サイフォンへと向かう線、もう一方は安政池から嬉野台地の西端へと流れ、今の兵教大附属小の辺りへ向かいます。

山中の分流点。29年前の写真ですが、今も変わらず田の命の水がゆったりと流れているのです。

東条ダムの水の旅―嬉野台地へポンプアップ

2010年07月20日



東条ダム（鴨川ダム）から出た水は、幹線水路をゆったりと流れ、隧道や水路端を通りながらやがて嬉野台地の裾を曲がりくねりながら走り続けます。嬉野台地は独立した台地なので、ここでポンプアップして水を台地に送ります。水路から水を取り入れ、ポンプ小屋から一気に約30メートル上げるのです。管の内径は約40センチ。吐口はコン

クリートの頑丈な構造物になっています。

台地の一番高い所にポンプアップされた東条ダムの水は、台地を東から西へとゆっくりと流れながら田を潤していきます。かつて、「不毛の台地」といわれた嬉野台地が豊かな水田に姿を変えたのは、この東条ダムの水が送られてきたからです。

写真はポンプアップされて水が噴き出す口ですが、29年前に取材した当時のものです。水は流れていませんが、田植えの前の頃、この口から勢いよく水が噴き出します。

東条ダムの水の旅―台地を潤す豊かな水

2010年07月23日

東条ダム（鴨川ダム）から始まった水の旅はおおよそ標高100メートルの高さを流れていきます。幹線水路は嬉野台地の東の山中をゆったりと流れて、途中、ポンプアップされて台地の東端、依藤野へ上がり、台地をゆっくりと西に向かって流れなが



ら田を潤していきます。

道路よりも高いところを流れているので、道路とぶつかるところは道路の下を管でくぐります。そして、反対側に噴き出した水は水路に分流さ

れながら、さらに台地に広がる田圃に送られていくのです。

5月の末に水が流れてくるのですが、それまでは水のない井戸のように見えます。写真は、県道から兵庫教育大学に通じる道路との交差点近くの分流点ですが、水のない台地に太陽の光に輝きながら水がぐんぐん噴き出してくる風景は人の心を満たしてくれます。29年前のものです。

嬉野台地—東条ダムの水の旅

2010年08月21日



東条ダム（鴨川ダム）の水が嬉野台地を潤している。このことを29年前に兵教大附属小の4年生の社会科の学習で探究しました。教材研究でダムから幹線水路を追ってバ

イクで走り回ったことで、私自身も驚きの連続でした。

この写真はその一枚ですが、嬉野の附属小学校の近くまで流れてきた水路が円筒の分水口でさらに分かれていくところを撮ったものです。子ども達と一緒に見学しましたが、何せ、当時は「まむし危険」の立札が立っている藪の中で、近づくのも危険でした。

だいたい標高100メートルの等高線にそって水路が流れていました。

現在では、周囲は住宅地になっています。当時、ここが住宅地になることなど予想もしませんでした。私が中学生だった昭和40年代はじめ、この分水施設のもう少し手前の山で、キャンプをして、炊事の水は水路の水を使っていたことを思い出します。

東条ダムの水―山中でサイフォンへ

2010年08月18日



この写真は29年前、教師だったころに社会科の教材研究調査で、東条ダムからの用水路をたどって嬉野台地の東端の安政池付近まできたところで撮影したものです。

この歴史ブログでも当時撮影してまわった用水路の写真を紹介してきましたが、その一枚が、このサイフォンの呑口です。ゆっくりと流れてきた水はこの呑口で谷の底へと一気に管の中を落ちて、谷の向こうの吐口へと駆け上がって噴き出します。

呑口のところに立つと、真っ暗な管の中へと吸い込まれていく自分を想像して恐怖感に襲われます。山の中ですから、ふだん誰にも見られることもなく、ひたすら水を呑み込み、向こうの吐口へ水を送る。そんな仕事を続けている。何か、姿勢を正してご苦勞様です、と敬意を表したくなる思いです。

谷を渡るダムの水―曾根のサイフォン

2006年11月20日



昭和池から三草野を通り、藤田の谷を渡って嬉野台地に水を送っていたサイフォンの呑口、吐口の遺構を紹介しましたが、東条ダムの水もトンネルを通り、谷を越え、野を走って遠くの田まで旅を続けます。

写真は嬉野台地の安政池の近くから東条川の谷を渡って小野市の万勝寺の台地までを結ぶ長大な曾根サイフォンです。長さ約1000メートル余りで川をまたぎ、地中にもぐり、池を越え、密閉された管の中の水が勢いよく流れます。落差は40メートル余り、管の直径は約90センチあります。土地の人は、小さい頃このサイフォンの上を歩いて遊んだと話していました。

東条ダムからの水路は地形に応じてトンネル、サイフォン、水路橋、分水口など実にさまざまな姿を見せてくれます。まさに「田の血」、「いのちの水」といわれた水を運んでくれる「血管」なのです。

曾根サイフォン―川を、池を跨いで

2010年07月07日

昨日に続いて東条川用水の曾根サイフォンの写真を紹介します。29年前に水^{みち}の路を追ってバイクを走らせ取材した写真の1つです。台地から一気に約40メートルを下り、東条川を跨いで



谷を渡り、池を跨いで台地に駆け上がる。全長1000メートル余。当時は緑の田園に銀色の管がまぶしく光っていました。その壮大な水の路に感激したことを今もはっきり覚えています。

写真は吐口側の池の上を跨ぐサイフォン管です。当時、近くの人に聞いた話では、この管の上を歩いて遊んだといひます。

29年前の曾根サイフォン

2010年07月06日



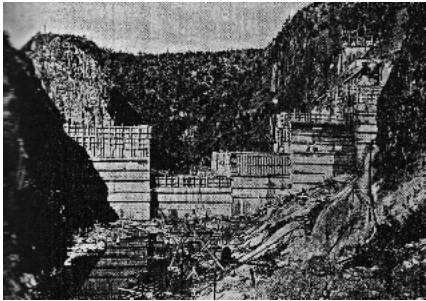
5日（日）、県公館で「疎水サミット in ひょうご2010」が開かれました。疎水の価値を再認識する絶好の機会になったと思います。

29年前、兵庫教育大学附属小学校の4年生の社会科を担当していましたが、身近な地域の学習で、「嬉野台地の開発と東条ダム」という授業づくりに取り組みました。東条ダム（鴨川ダム）

から延びる水路を追いかけて、バイクでどこまでも入って行きました。嬉野台地から東条川の谷を越えて船木ダムのある台地へと延びる銀色の太いパイプ。それが曾根サイフォンです。この写真はその遠景です。写真に白マジックで目印を入れています。29年前の感動を今も新たにしています。

東条ダムの建設工事

2006年11月14日



昭和23年（1948）9月1日、前年から行われていた土井部落の立ち退き補償交渉が解決し、ダム建設の調印式が行われました。

鴨川ダム（東条ダム）はどのようなダムだったのでしょうか。

①高さ 42メートル 長さ 97メートル

②ダムの種類 直線重力式コンクリートダム（ダム自身の重力で水圧に耐える）

③貯水量 838万立方メートル

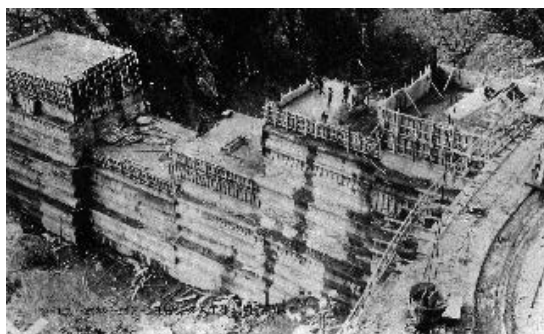
東条川の支流である鴨川を黒谷でせきとめて水を貯めますが、鴨川だけでは不足するので、東条川上流の三田市大川瀬で取り入れ堰をつくり、ダムまで導水路で水を引くことになりました。また、東条ダムによるかんがい地域の中に2つの補助池をつくり（安政池と船木池）、ダムや池から幹線水路、支線、分線がつくられ、受益地域のすみずみまで用水がゆきわたるようにされました。

昭和24年3月、ダム工事の起工式が行われました。農林省としては戦後初の国営水利事業であり、コンクリートダムも珍しい時代であったようです。当時の技術の粋が集められ突貫工事が行われました。コンクリートの砂利（加古川）を運ぶトラック（ダンプカーのはしり）も特注されました。このトラックが走る道路は重さで「餅のようにへこんだ」といいます。また、道路沿いの民家の屋根瓦がずれ落ちることもあったようです。ダム本体のコ

ンクリートの打ち込みにはケーブルが使われました。昭和26年、ダムは完成し、同年11月には貯水式が行われました。写真はダム建設中のものですが、谷の深さ険しさがよくわかります。

東条ダム建設工事の写真

2010年02月20日

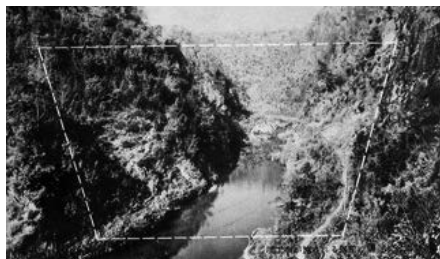


地元の方から提供いただいた東条ダムの絵はがきを紹介していますが、今日はダム建設工事の写真に掲載します。

写真は東条川の支流、鴨川をせき止めて築かれたダム本体の工事現場のものです。「昭和二十五年十二月七日当時ダム工事現場の壮観」と印刷されています。ダム工事は昭和24年3月に着工され、26年11月に完成しています。25年12月のころにはコンクリート打設作業が夜も続けられたということです。

東条ダム建設前の写真（絵はがき）

2010年02月17日



昨日紹介した東条湖（鴨川ダム）の絵はがきに続いて、鴨川ダム（東条ダム）建設当時の写真の絵はがきを紹介します。

加古川の支流、東条川にそそぐ鴨川が流れる加東郡東条町黒谷の土井部落は戸数7戸の地区でした。周囲を山に囲まれて、1ヶ所だけ山が裂けて割れ目となっており、そこを鴨川が流れていたわけです。この割れ目をふさいで築かれたのが鴨川ダムだったわけです。

写真はその割れ目で、点線は築造予定の鴨川ダムを示しています。ダム工事は昭和24年（1949）3月に起工式が、そして、26年11月に完工貯水式が行われました。

東条湖と清水寺の図（絵はがき）

2010年02月18日



もう一枚の絵はがきを紹介します。

東条湖は昭和26年（1951）に完成した鴨川ダムによってできた人造湖ですが、周辺の美しい

景観とともに清水寺や朝光寺などの古刹もあり、昭和32年には県立公園に指定されました。

この絵はがきは「東条湖上より播州清水寺及丹波連峰を仰ぐ山紫水明の壮観」とキャプションが入った絵になっています。奇岩が聳える東条湖には船が浮かび、遠くの山上に清水寺の堂塔が霞の中に浮かんでいます。

東条湖の絵はがき

2010年02月16日



この写真は東条湖の絵はがきです。地元の方から提供いただいた絵はがきの一枚ですが、昭和30年代前半に東条湖観光協会がつくったものだ

と聞きました。

写真下には「兵庫県立自然公園 東条湖 LAKE TOJO Hyogo-Prefectural Natural Park」と印刷されています。

東条ダム（鴨川ダム）は食糧増産をめざし、かんがい用水ダムとして建設された戦後第1号の国営ダムです。昭和26年（1951）秋に完成し、昭和32年には県立自然公園に指定されています。

おそらくその頃の写真だと思われますが、湖の周囲の山もまだ開発が進んでおらず緑が美しい景観となっています。ダムができてから60年が経っていますが、完成間もない頃の珍しい写真です。

昭和56年―東条湖畔の食堂で― 湖底に沈んだ土井部落の語り部

2006年11月10日

昭和56年（1981）、東条湖畔の食堂に藤原栄さんを訪ねました。

藤原さんは東条ダム建設に伴って立ち退きを余儀なくされた土井部落の住民であり、その由来を語り続けておられました。



店の壁には「土井部落立退ノ由来」を書いた紙が掲げられており、藤原さんは棒で文字を指しながら、少し甲高い張りのある声で解説をして下さいました。

東条ダムは戦後まもなく鴨川をせき止めて造られた重力式ダムです。貯められた水は農業用水として利用された。また、ダム湖は観光でも知られるようになり、遊覧船が浮かび、湖畔には旅館や店が立ちならぶようになりました。

しかし、ダム建設のために土井部落7戸51人が立ち退きを余儀なくされ、藤原さんはその一人でした。

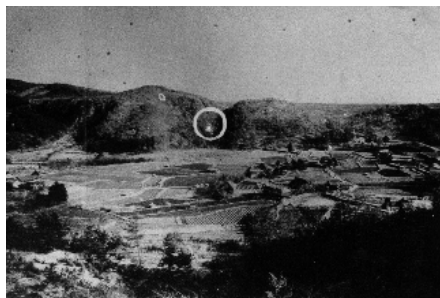
「天恵の地形“土井”は池になる」は、旧加東郡市場村（現小野市）村長、近藤準吉の残した言葉です。大正時代の末期、干ばつに悩み、かんがい用水の確保を願っての言葉でした。土井部落は東条町黒谷字土井（現加東市）のことで、四方を山で囲まれた地形で、一カ所だけ鴨川が流れるところが切り裂いたように出口となっていました。これをふさげば池になる、と近藤翁は考えたのです。

こうしてダム構想はあったのですが、土井部落の人々にとっては迷惑な話でした。加古川流域の町村が期成同盟を結んで計画の推進を図りましたが、時代は戦争へと突き進み、実現は遠のいていきました。

藤原さんは湖底に沈む前の土井部落の写真を指しながら、立退きの由来を語り続けました。

湖底に沈んだ村—土井

2006年11月10日



ここに一枚の写真があります。ダムに沈む前の土井部落の全景です。

中央の○印が、ダム建設位置にあたります。写真を見ると、土井部落は周囲を山に囲

まれた典型的な盆地の地形であることがわかります。○印の場所が鴨川が流れ出るただ1つの裂け目になっていたのです。

大正時代の末に加東郡市場村村長だった近藤準吉が残した「天恵の地形、土井は池になる」という有名な言葉は、まさにこの○印の裂け目をせきとめれば、大きな池になる、ということだったのです。

大正時代末に干ばつに悩んでいた加古川流域の人々は、東播農業開発期成同盟会をつくって大規模な農業用水確保の計画を立て国会に陳情を行いました。しかし、時代は戦争へと進み、ダム建設の計画実現は遠のきました。

日本が戦争に敗れたあと、食糧難の問題が起きました。食糧増産が緊急課題となり、再びダム建設の話が浮上しました。GHQも現地視察を行い、昭和22年（1947）には上東条村（旧東条町）に国営東条川農業水利事業所が開設され、事業を進めていったのでした。

土井部落の人々にとっては「土井は池になる」といわれて以来、静かで平穏な日々の生活はぐらつきました。戦争の時代には「水上機の発着場になる」という話も出たといえます。戦後、ダム建

設の話が急展開するなかで、土井の人々は立ち退きという現実の問題に直面したのです。

湖底に沈んだ土井―土井部落の立ち退き

2006年11月12日



昭和22年（1947）、東条川農業水利事業所が開設され、ダム建設に向けての具体的な動きが始まりました。しかし、これは土井の人々にとっては立ち退きという「悪

夢」が現実のものになっていくことでもありました。

補償交渉はこの年の末頃から本格化したようです。しかし、同時にダム建設の地質調査などが行われ、ハッパの爆音が人々を驚かせたということです。交渉は一進一退しながら、翌23年8月には成立し、9月に調印が行われました。

こうして土井部落、7戸51人が住みなれた土地に別れを告げ、近くの黒谷や天神に農地を確保して移住したのであります。

この写真もありし日の土井部落の姿です。田や畦道、藁葺屋根の農家、池などが写っています。今でも雨が降らずに水位が下がる年には湖底からこうした姿があらわれることがあります。

東条湖の60周年

2009年08月09日

8月1日、東条湖畔のレストランで東条湖60周年記念式典が行われました。



大雨が降る中、式典、写真展示、立ち退き者等の懇談等が行われましたが、会場の外に広がる東条湖は長雨で満水に近い状態になっており、この時期のダム景色としては

珍しいものでした。

この歴史ブログでも平成18年(2006)11月に鴨川ダム(東条ダム)の建設、湖底に沈んだ土井部落の立ち退きの話などを紹介してきました。私にとっては、昭和50年代半ば、社会科教員として「ダムの建設と台地の開発」をテーマとした授業づくりに取り組んだ際、何度もダムを訪れ、湖畔で食堂経営をしながら土井部落立ち退きの「語り部」藤原栄さんからお話を聞かせてもらった思い出の深いところでもあります。

会場には、今は湖底に沈んだダム建設前の土井部落の遠景写真をはじめ、工事中のダム、「農林省」の名前が入ったトラックが道に連なっている写真など建設当時の珍しい写真が展示されています。立ち退き者の一人である藤原さんが写真に写っている家や池を指さして当時の生活を話しておられました。

約60年の年月が過ぎ、ダム建設や湖底に沈んだ土井部落の記憶は薄れかけています。それだけに今回の60周年の式典、写真展示、懇談会の企画は貴重なふるさとの歴史をよみがえらせる素晴らしいものになったと思います。

これを一回性のものにせず、ダムを訪れた人や子どもたちの学習などに広く活用できるような資料展示施設があればと思うところです。

写真はダム堰堤近くの店の中で「土井部落立ち退きの由来」を話して下さる藤原栄さんの姿です（昭和56年当時）。

東条ダム建設物語—土井立退の由来

2012年06月06日

加東市の東条にある鴨川ダム（東条ダム）は、戦後第一号の国営ダムとして昭和26年（1951）11月に完成しました。

このブログでも何度も紹介してきましたが、今回は、ダム建設で湖底に沈んだ土井部落の立退きの由来を東条湖畔で食堂を営みながら語り続けておられた故藤原栄さんの遺されたメモによって紹介します。

藤原さんとは30年余り前に社会科の教材づくりのために東条湖を訪れた時にお出会いして以来、兵教大附属小、中学校の学習で、何度も児童生徒の前で土井部落立退きの由来を語っていただきました。

今日紹介するのは、授業のために準備をされた手書きのメモです。貴重な当時の経緯を読み取ることができます。

土井部落立退の由来

当時は上東條村黒谷字土井部落でありました。

周囲は山に囲まれた盆地でありました。此の土井郷は、350年来の歴史を有する部落であり、昔より代々の先祖を、守られた、尊い方々だったと、伝説を耳にしています。

○東条湖は何故出来たかの理由

昭和十六年十二月八日、第二次世界大戦が勃発しました。

日本兵士の若丈夫（マスラオ）が、続々と召集令状のもと、海

山越え、妻子を日本に残して、激戦地に出征されます。長期戦争に亘り、悲惨な非常事態の連続であります。国民は戦争に全力を傾注された。何しろ人手不足も深刻となり、食糧難に追い込まれました。

○昭和二十年八月十五日天皇陛下より終戦を賜りました。敗れ果てた日本に甚だしい飢餓が迫り、国内情勢は食糧増産の急務に当たり、政府はこの難局を打開するには食糧増産が先決問題として、戦後すぐ、土井部落が最適地と選定されました。

○二十一年末より、愈々国営として、立退交渉が始まりましたが、先祖を守り続けた老人は絶対立退反対と頑張る人、補償次第と諦める人が、日夜集会され、議論百出するが、相手は政府であります。有利な善後策を講じる外なく、一大革命的措置であります。

○二十二年と言えば、国民が疲れ切ったにも拘らず、増産目標といった国の命令が理解されたのです。国内情勢は食糧の急務に当たり、早急に測量、土質検査、岩盤爆破等に着手されました。

○二十三年より本格的なダム築造に日夜交代で二五〇人が現場で急ピッチの着工でありました。二十二年から起工され、二十六年へと、五ヶ年を費して築造されます。立退者の強い補償悲劇の連続であり、問題が解決せない儘工事に着工されます。

これより立退者は住み馴れた家屋の破壊に懸命であり家道具の運搬を第二の新天地に運び、転々舞の忙しさであります。それも鉄車を牛に馳け波（並）大抵でありました。そして評価移転費は各専門に於て行はれました。それは農地、建造物、山林、墓地、石碑、庭木などであります。

耕作田七町歩畑二町歩で、農家七戸、総家族五十一名を有す。真に平和な部落であったが、総て郷土を湖底に沈めて新天地に生

活の本拠を求めねばならない、大きい衝撃であった。故郷を去るに忍びぬ、人情は如何ともなし難く、東条村内に移転を希望する者が全部でありましたが、黒谷四戸、古家一戸、常田一戸で、一軒は神戸に移住に応じられ、配分して移転先を決定移動したのです。やはり住めば都とやら、故郷を後に惜しみつつ涙を呑んだ立退者であります。

○第一深刻な問題は、三五〇有余年の歴史ある先祖の墳墓の地の移動であります。墳墓の土を掘り返し、骨が出る、又出たとの声。この無念さに南無阿弥陀仏と唱えつつ、骨を木箱に納めて棺は静かに故郷を離れ別れを惜しみ乍ら第二の墓地に埋葬された。この心境は体験した者でなければ分かりません。これが一番の悲劇の一駒。身にしみた立退者です。

○二十四年九月見送り資金が転げ込み、工事は俄かに活気づき築造作業の昼夜兼行という突貫工事をされ、現場に常時二五〇名の常務員であります。

○二十六年十一月東条湖が完成したのです。その暁きに、湖の命名が名付られ、国営兵庫県立自然公園と、指定を受け、これこそ立退犠牲者我々の慰めでもあると、痛感したのです。

堰堤の高さ、推進43米5で、長さ97米、貯水量860万屯、湖の広さ54町三反歩であり、一市三町にまたがる、開田開拓等四千町歩の灌漑用水として食糧増産に大きく活躍。これぞ時代が生んだ東条湖であります。そして播州になくてはならない水郷として親しまれ、大きく役割を果たすダムだと思います。

これも播州の清水寺のみ嶽からの流水が東条湖に注いでいます。土井郷はいよいよ湖底に沈み、溜りゆく、待望の満水と化し、農民は灌漑深く安心された事でせう。

そして、社、小野方面に飲料水として送水され、利用あることは大変嬉しく思っています。水の有り難さ、身を以て感動して止みません。そして東条町の観光地のシンボルとして、愛され親睦を頂いております。いつ迄も見守って下さいますよう、唯一の願とする立退者であります。

昭和34年—東条湖をバックに

2008年07月30日



この写真には、昭和34年（1959）5月20日の日付と「東条湖を背景に建委の一行」の書き込みがあります。社町議会建設委員会の視察の際に撮影された

ものではないかと思います。

写真の背景には満々と水をたたえる東条湖が写っています。湖の後方少し左側にダムの上が見えます。

東条ダムは、戦後間もない昭和24年に工事が始まりました。戦後初の国営水利事業であり、コンクリートダムも珍しいものでした。当時の技術の粋を集めて突貫工事が行われ、昭和26年、ダムは完成し、同年11月には貯水式が行われました。

ところで、議員さんらの脇に写っているのはオート三輪車というのでしょうか、ハンドルもバイク型のものです。小さい頃に見たような気がします。懐かしいですね。

昭和29年頃—東条ダム堰堤から展望台

2010年09月05日



東条ダム（鴨川ダム）は、戦後の食料増産のために造られた、戦後第1号の国営ダムとして知られています。この歴史ブログでもその建設の経緯や工事について紹介してきましたが、ダムが完成して間もない昭和29年頃、ダムの堰堤上で楽しむ人を撮った一枚がこの写真です。背後には展望台が写っています。写真から当時の人々の何か

明るい気分が伝わってきます。

昭和29年頃—展望台から東条湖を望む

2010年09月06日



昨日に続いて、昭和29年頃の東条ダム（鴨川ダム）を展望台から望んだ写真を紹介します。この高さからダムによってできた湖を展望すると、天空から見下ろしているようで、気分も爽快だったでしょう。



東条ダムを眼下に宴—昭和26年頃

2010年09月07日

昨日に続いて、東条ダム（鴨川ダム）を見下ろす展望台で、湖を眼下に宴を楽しむ人たちの写真です。

鴨川学校前のりば—昭和30年代後半

2009年07月18日



アルバムを見ていると、私がまだ小学生の頃の写真が目にとまりました。

場所は神姫バスのりばで「鴨川学校前」で撮影したものです。その側に東条湖観光協会の広告塔

が立ってます。

広告塔には、「関西の仙境 東条湖」とあり、「仙境」という言葉が当時はピッタリする環境だったことがわかります。乗船希望者は東条湖観光協会へ、といったことも書かれています。先日、東条湖観光開発に関係された方から、観光船の許可を取るのにずいぶん苦労したというお話を聞かせていただいたばかりです。

バス乗場の側には道標が2本立っています。字は読み取れませんが、この道標は今はどうなっているのでしょうか。当時と変わらないのはおそらく背景の山なみだけだと思います。

② 昭和池と嬉野台地の開発

巨大な溜池―昭和池の築造― 大正13年の大干ばつをきっかけに

2006年11月16日



加東市の北部、三草山の麓に昭和池があります。昭和池は人造池なのですが、ここにこんな巨大な池が造られた経緯を紹介しましょう。

大正13年(1924)、この地方は大かんばつに見舞われました。これをきっかけに農業用水の水源を確立する必要があるとの声が高まり、県営事業として巨大溜池を三草山溪谷に造ることになったのです。そして、昭和3年に工事が始まり、9年に完成、昭和池と命名されたのです。

国道372号線から昭和池に通じる細い道に入っていくと、やがて目の前に巨大な堰堤が姿を現します。高さ30メートル、幅(長さ)約200メートルの巨大な土堰堤です。

昭和池から延びる幹線水路によって運ばれる水は、上福田村、社町、福田村、加茂村の水田をうるおしました。昭和池から社町への水路は、久米川の流れる藤田の谷を渡って嬉野台地に運ばれます。どのようにして広い谷を渡ったのでしょうか。サイフォンです。今では使われていませんが、その呑口、吐口が残っています。

今、昭和池は水上バイクを楽しむ人や三草山登山、ハイキングなどのレジャーで親しまれています。写真は昭和池と三草山です。

昭和池から嬉野台地へー藤田サイフォン全景

2010年07月11日



29年前、兵教大附属小に勤務し、4年社会科の教材研究で嬉野台地の開発を調べました。その時に、昭和池からはるばる水を引いて嬉野の開発が進められたことを知り、その水路を辿ってみました。

三草山の麓に築かれた昭和池。そこから水路や隧道で水路が延びる。しかし、嬉野台地に水を送るには、千鳥川（久米川）の谷を渡らなければならない。そこで、長大なサイフォンが築かれたのです。

写真の白い矢印が藤田サイフォンの呑口です。サイフォンは谷を下り、川の下を通り、嬉野台地側（写真右）に駆け上がって吐口に噴き上がってきます。この写真は吐口側から呑口を望んで撮ったものです。

29年前、すでに使われてい wasn't でしたが、昭和池幹線水路旧福田線の藤田サイフォンは偉大でした。今は水が走らなくなったこのサイフォンですが、先人の開発の大切な遺産として記憶しておきたいと思うのです。

谷を渡り嬉野台地に噴き出す昭和池の用水

2006年11月19日



昭和池が造られた経緯についてはすでに紹介しましたが、昭和のはじめ、三草山の麓に人力で築かれたこの大堰堤は今でも私たちを圧倒します。

昭和池に貯められた水は、堰堤の底から水路へと放出され、長い旅が始まります。その水は夏でも手がしびれるほど冷たく、中高生の頃にキャンプで西瓜やお茶を冷やしたことを思い出します。池面の水は深さ1メートルほどまではぬるくても、それ以上の深さになると一気に冷たくなります。飛び込みなどしようものなら、心臓マヒを起こしてしまったり、足の方が冷やされてけいれんを起こして溺れてしまいます。当時、耳にたこができるほどそんな注意をされたことが今でも頭にしっかり残っています。

さて、昭和池の幹線水路は三草をぬけ、藤田から嬉野へ、そして社、東実へと延ばされました。藤田から嬉野台地へ。そこには久米川の流れる広い谷があります。この谷を水はどのようにして渡っていったのでしょうか。谷を渡す方法としてサイフォンが造られたのです。呑口と吐出口は地表に造られていますが、サイフォンの管は地下に埋められています。

サイフォンの呑口と吐口を探しました。嬉野の方は水路をさかのぼって行き、台地の北の谷が見渡せるところまで来た時に見つけました。コンクリートで造られた四角い構造物の壁に「第参号サイフォン吐口」と白字で名が書かれていました（写真）。そこ

から真っ直ぐに幅広い谷の向こうに目をやるとほぼ同じ高さの台地が見えます。この谷を管をつないでサイフォンが造られ水が上がってくるのです。壮大な工事です。呑口にも行ってみました。そこからは谷の南の嬉野台地が見渡せます。

東条ダムの水が導かれ、やがて昭和池からの水はその役目を終えていきました。サイフォンの補修に費用がかかりすぎることもありましたが、このサイフォンはいつまでも残して台地の開発の苦勞を未来に伝えていきたいものです。

昭和池からの水―藤田サイフォン呑口

2010年07月12日



昨日は、昭和池から嬉野台地へ通じる水路のうち、藤田サイフォンの全景を写真で紹介しました。

今日は、そのサイフォンの呑口、すなわち昭和池から長い旅に出た水が水路から管に流れ落ちるところの覆いとなっている施設の写真を紹介します。昨日の全景写真の白い矢印の地点にあり、29年前の当時もすでに使われておらず、山の中にひっそりとコンクリートの四角い構造物があるだけでした。

「第参号サイフォン呑口」と白い字が浮き彫りになっていました。この施設を含めて昭和池第三号サイフォン（藤田サイフォン）をまるごと地域の歴史遺産としてもう一度光を当てていきたいものと思います。

昭和池からの水―藤田サイフォン吐口

2010年07月13日



昨日は昭和池から嬉野台地に延びる幹線水路に設けられた藤田サイフォンの呑口の写真を紹介しました。今日は谷を渡って台地の北端に噴き出す吐口の写真を掲載します。

この写真は29年前に撮影したのですが、現在も変わらずほぼこの姿で存在します。しかし、道路から離れた場所にあることから、知る人も少なくなる一方です。かつて、昭和池からの水が谷を渡り、この台地に噴き上がって、さらに水路を走って、遠く福田地区へと延びていたのです。その歴史を今に伝えているのがこの写真の構造物です。

台地の円筒分水施設

2010年07月10日



台地によきと突き出たコンクリートの巨大な円筒。これは、農業用水の円筒分水施設です。29年前に嬉野台地の開発と東条川用水とともに昭和池の用水

についても水の路を追って調べましたが、その時に三草小のある台地で出会った風景です。円筒の高さは人の背を超える2メートルはあるでしょう。そして直径はその倍の4メートルぐらいでし

ようか。水田と林の他に何も無い台地に突き出たこの施設。背景に写っているのが三草山です。

昭和池から谷を渡って稲尾の台地へと延びる水路。水の路はこの円筒の中で分水され、さらに枝分かれして台地の水田を潤していきます。何も無い台地の中に忽然と噴き出す水。その源は遙か向こうに見える三草山の麓に築かれた昭和池なのです。

大正13年の大旱魃がもとで築かれた昭和池。その土堰堤は巨大です。その池の底から長い水の旅が始まるのです。

台地を走る水路橋

2010年07月09日



29年前、教材開発のための調査で東条ダム（鴨川ダム）や昭和池の用水路をたどって単車で走り回った際、地形に応じてさまざまな姿の水路が工夫されていることに驚きと

感動をもってカメラに収めたことを今もよく覚えています。

昭和池から谷を渡り、稲尾方面（加東市稲尾）へ延びる水路をたどっていると、稲尾から滝野団地のあたりの台地を人の頭より少し高いところを上部が開いたコンクリート管がずうっと延びていました。

昭和26年—昭和池の魚とり

2008年07月19日

この写真は、昭和26年（1951）10月に行われた昭和池



の魚とりのようすを写したものです。

昭和池は大正13年（1924）の大干ばつの経験から三草山の麓の谷をせき止めて造られた巨大な農業用水の溜池で、昭和3年に工事が始まり、9年に完成、昭和池と命名されました。

その堰堤は、高さ30メートル、幅（長さ）約200メートルの巨大な土堰堤ですが、写真は底が見えるまで水が抜かれた状態で、その土堰堤の上から写したものだと思われます。余りに巨大過ぎて、人がほんとうに小さく見えます。

嬉野開墾の話—西瓜畑とキツネ

2006年11月17日



昭和56年（1981）頃、昭和池からの用水と嬉野台地の開拓について調べましたが、そのときに聞いた開拓時代の苦勞話を紹介しましょう。

嬉野台地は松の生い茂る赤土の不毛の台地といわれていました。その台地に開拓農家として入植して開墾をされた方の話だと、毎日毎日松の木を伐り倒し、根を掘り出す作業が続いたそうです。松の根元近くの幹を切り、上の方にロープをかけて傾斜の低い方に引き倒すのです。残った切り株は根を切って掘り出します。

こうして不毛の台地は耕され畑に生まれ変わりました。畑では西瓜が栽培されました。ところが、そろそろ収穫だという頃になると、キツネが出てきてツルをかみ切って器用に西瓜をころがして巣にもって帰るのです。キツネはかしこくて、はじめに偵察係が一匹出てきて人がいないことを確かめ、そのあとに一族数匹が出てくるそうです。困った農家の人々はすいか畑に罠を仕掛けて待ちうけました。

すると、ある日小ギツネがかかったのです。そこで、見せしめのために畑に死んだ小ギツネを置いておいたそうです。これでキツネは姿をあらわさないはずでした。

ところが、ある朝、畑に出た農家の人はいびつくりしました。収穫直前のすべての西瓜のツルがかみきられているではありませんか。もう出荷できません。これはきっと小ギツネを殺されたキツネの仕返しだと思った、ということでした。

この話を聞いた当時、夜になると嬉野ではキツネがギャーギャーと鳴く声がよく聞こえました。狐谷という地名の通り、キツネがたくさんいたのです。

キツネは人をだますといわれます。こんな話を聞きました。キツネと出会ったとき、自分よりキツネが高い場所に居て目が合うと、そのときに人はだまされてしまう、ということでした。そんな時は目を合わせないことです。

写真は嬉野開墾記念碑です。県立教育研修所の南、人家が途切れた田圃の中、用水路の側に立っています。

昭和池(三草山溜池)築造の耕地整理組合設立

2014年11月25日



23日(日)、小野市の下東条コミセンで東条川疎水ネットワーク博物館のトークライブ&カフェが開催され、東条川疎水について参加者の思いや今後の展開

が話し合われました。

東条川疎水ネットワーク博物館は、鴨川ダム（東条ダム）と用水路、昭和池とその用水路とため池、田圃をつなぐ水のネットワークとその流域である加東市、小野市の地域文化を大切な地域資源として見直していこうという活動です。豊かな農業地帯でありながら、降水量が少なく、水に苦しんできた当地方にとって、ダムとため池、これを結ぶ用水路は命の道でもあります。昭和池は大正13年、東播地方を襲った大干ばつを契機に三草山（加東市）の麓に巨大なため池の築造が計画され、昭和のはじめに工事が行われました。その土堰堤は県下最大級の大きさです。今も昭和池からの用水は地域の水田を潤しています。写真は東条川疎水ネットワーク博物館の東条川疎水のジオラマです。

その昭和池築造に関する当時の耕地整理組合設立に関する通知が当時の社区（現加東市社）の文書綴に綴られています。

拝啓 各位益々御清栄候条奉賀候 扱て兼而御尽力相煩はし居り
候三草山溜池県営に関し耕地整理組合設立之件六月十七日付御認
可相成候ニ付テハ之れが経過報告方々総会開催の打合せ致度義有
之候間御多忙恐縮の砌ニ候へ共御繰り合せ来ル七月十日午後九時
社町公会堂へ御参集被成下度此段御案内申上候 草々

昭和貳年六月三十日

発起人

松本 兼蔵

田淵仁一郎

神戸 経治

井上 萬司

藤原 正仁

各位

大正2年—嬉野開発の計画

2010年10月23日

神戸又新日報（こうべゆうしんにつぼう）の大正2年4月25
日付に、嬉野台地の開墾計画が動き出したことが報じられています。

●加東郡嬉野開墾協議会

加東郡社町外七ヶ町村所属の嬉野は県下に於ても著名の広野に
し元陸軍演習地として屢々使用せられし原野なるが這般同地を
郡事業として開墾すべく計画を立て是が用水の水源地を鴨川村土
江の滝と称する谷川より引水するとし既に設計実測等を終りしも
種々の都合上一時中止の姿となり居りしが本月廿一日関係町村の

有力者四十余名米田村に集会し種々協議の末今回の米国排日問題に鑑み同地を開拓し細民の海外移住者を此地に留め新町村を形成することに決し当日山県郡長、本多郡書記も臨場の上愈々来五月五日若くは六日関係町村長、郡会議員、有志者等社町郡公会堂に於て打合会を開催することに決定せり因に同地組合町村は社、上東条、中東条、下東条、米田、福田、上鴨川の八ヶ町村なり

以上がその記事です。嬉野台地の開発計画が大正時代のはじめにあったこと、また、その水源として今の東条ダム（鴨川ダム）あたりから引くことも計画されていたということに驚きました。敗戦後、食糧難を解決するためにダムが建設され、嬉野台地に水が引かれて台地の開発が進みましたが、もっと以前から、今から約100年も前からそのような計画があったんですね。

大正2年—嬉野開拓協議会が開かれる

2010年10月26日

神戸又新日報の大正2年5月15日付（1913）に嬉野開拓協議会が開催されたという見出しの記事が掲載されています。今月23日のブログで嬉野開拓に関する記事を紹介しましたが、その後、協議会が開催され、期成同盟会が組織されたことが報じられていますので紹介します。

●嬉野開拓協議会

加東郡嬉野原野開拓第一回協議会を十二日同郡中東条村尋常高等小学校大講堂に於て開催したり当日出席者は関係町村なる社、福田、上福田、米田、下東条、中東条、鴨川の八ヶ町村長、町村

会議員、大字区長惣代其他有志等百余名にして当日は山県加東郡長、本多郡書記も臨場の上先づ山県郡長より嬉野原野開拓計画に就て従来の経歴を述べ出席者一同に嬉野開拓概要書を配付し之が説明をなし次で米田村長山本友太郎氏（郡会議長）は本事業の極めて有利有望なることを説述して賛成を求め□で前代議士西村真太郎氏は明石、美囊、加古三郡に渉る山田川水利組合事業と嬉野開墾計画概要とを対照比較し其有利有益なる事を説明的講話をなし夫より協議会を終り山県郡長を座長に推し開拓経営準備として期成同盟会を組織する事とし会則を協議したり　～後略～

今では豊かな田園と兵庫教育大学、生涯教育センターなど教育施設がある嬉野ですが、約100年前は広大なる原野が広がっているだけでした。その開拓計画が動き出していたんですね。

統一嬉野台地の開発計画（大正2年）

2010年10月29日

大正2年（1913）5月30日付の神戸又新日報に嬉野台地の開墾計画の概要という見出しの記事が掲載されています。

記事によれば、嬉野開墾について、明治42年に県の技師に依頼をして調査した結果が次の通り報じられています。

一、嬉野の土質は粘土質にして水の浸潤極て少なきを以て用水期間95日と定め一反歩に付百五十立坪の水量を要す総反別五百八十一町とせば其水量八十七万一千七百七十立坪即ち一億八千八百三十一万二千三百二十方尺なり

一、引用水源は同郡鴨川村の内下鴨川村字森下の井堰を設け米田

村の内畑村、廻り淵村に通ずる里道の交叉点より上流百間の位置に予定し上東条村の内黒谷村及米田村地内を経て嬉野原野の高地下東条社米田の三ヶ町村界線を終点とし延長八千十間の疎水溝を設くるを可とす（水源地と終点地の落差は二十四尺〇三分平均勾配二千分の一なり）

一、用水引用期は東条川河水を其下流に於て使用する期間を除き毎年九月下旬より翌年五月下旬に至る二百四十日間に引用するものとす

一、水路より引用する疎水は其灌漑季迄貯溜せんため水支線路より分水し適當の地に貯水池を築造すべく其貯溜池十七ヶ所貯水量八十七万四千三百六十七立坪七合とす

以下略～

この計画によれば、鴨川を水源として水路を嬉野台地の一番高い地点まで引き、灌漑期間以外の9月から翌年5月までの間に池を築いて溜めておく、というものです。嬉野台地の土質は赤土の粘土ですが、水さえ通せば良田にすることができるとしています。こうした水利システムはすでに加西郡やいなみ野台地の開発で行われてきたものであり、その経験を生かすということでもありました。

この計画はすでに明治時代に出来ていたということになりますが、鴨川にダムが築かれて、嬉野台地に水が送られてくるのは終戦後の昭和20年代まで待たなければなりませんでした。

昭和池から嬉野台地へー水を送ったサイフォン管

2015年01月24日



県道西脇三田線の加東市藤田地区内を車で走っていると、道路の南側の田圃で工事が行われているのが目に入りました。重機が入り、田圃の土を動かしているように見え、何本かの管が置かれていました。

車を止めてよく見ると、この工事現場の南側、すなわち嬉野台地に向かって一筋に工事の跡を見通すことができました。そして、その先には昭和池からこの千鳥川の谷をわたり嬉野台地へ水を送った幹線水路のサイフォンの吐口の構造物が望めたのです。この工事は使われなくなったサイフォンの水管を撤去する工事であることが分かりました。

昭和池とは、大正13年（1924）の大旱魃をきっかけに農業用水の水源を確立する必要性から、県営事業として三草山の溪谷に造られた巨大な溜池で、昭和3年に工事が始まり、9年に完成、昭和池と命名されました。その巨大な土堰堤は高さ30メートル、幅（長さ）約200メートルに及び、県下最大級の土堰堤です。

昭和池からは、幹線水路によって水が運ばれ、当時の上福田村、社町、福田村、加茂村（現在の加東市域）の水田をうるおしました。昭和池から社町への水路は、久米川（千鳥川）の流れる藤田地区の谷を渡って嬉野台地に運ばれました。この広い谷をサイフォンで渡ったのです。今では使われなくなり、その呑口、吐口、

地下の水管、水路が残っています。嬉野台地側には吐口辺りに説明板が設置されています。

昭和56年当時、嬉野台地の開発を教材化するために調査をしましたが、昭和池から送られてくるサイフォン施設の壮大さに感動したことを今もよく憶えています。現在、兵庫県北播磨県民局が取り組んでいる東条川疎水ネットワーク博物館構想では、東条ダムとともに昭和池からの水路を含めて、調査や学習にが進め



られています。この藤田サイフォンは嬉野開発と農業用水の確保という地域の開発、産業に大きな役割を果たした施設、歴史・農業遺産として大事にしたいと思います。

▲昭和池から嬉野台地に送られたサイフォンと用水路の説明板



▲昭和56年(1981)の頃のダムと湖



▲ボートの浮かぶ東条湖（昭和56年）

兵庫県議会本会議等での関連質問記録

1. 平成22年9月 第306回定例会（関係部分）

（第5日 10月1日）

質問の第2番目は、農業農村整備事業の大幅な削減についてであります。

7月の初め、県公館において、「疏水フォーラム in ひょうご 2010」が開かれました。「会場がこれ程満員となったのは久しぶりだ」と井戸知事のお言葉のとおり、会場は県内外の出席者で満員でありました。オープニングでは、県立農業高校演劇部の女子生徒による演劇、「水を求めて―いなみ野台地の水開発の歴史―」が上演され、高校生が身近なため池や疏水の価値に目覚めていくといった内容でありました。

「疏水」という言葉はふだん使われませんが、フォーラムの案内によれば、「疏水とは、かんがいや舟運のために土地を切り開き水路をつけ、通水させること」とされており、専ら「用水」という機能的な意味で使われているようであります。

しかしながら、フォーラムでは、機能的意味だけではなく、文化の香りがするというとらえ方、すなわち、共生文化としての疏水、歴史・伝統の継承や原風景としての疏水といった非常に奥深い内容を持っていることを知ることができ、感銘を受けました。

また、講演では、兵庫教育大学の南埜猛准教授が、疏水とため池の取り合わせは世界的に見ても珍しい水利システムであることを詳しいデータ、地図等を用いて強調され、その価値を我々自身をもっと知る必要があること、そして、子供たちにも伝えていくことが過去と現在、そして未来をつないでいくことになることと力説をされました。

小さいころからため池、用水路を身近なものとして育ち、また教職に就いてからは、地元加東市、そして小野市域の豊かな農業地帯を潤す東条ダムと東条川の用水、ため池を題材とした社会科の学習教材を作ったりいたしました。そうした経験に加え、今、ダムの水を使って米を作っている一人の農業者としても、疏水の持つ価値について、大いに共感する内容でありました。特に、本年のように記録づくめの猛暑に加えて、降雨のなかった夏に水路を流れてくる水を田んぼに入れるたび、水を確保するためにダムや池を築き、水路を延ばしてきた先人の努力に対して感謝の気持ちを抱かざるを得ませんでした。

しかしながら、現実には、建設以来40年以上が経過し、老朽化が進み、谷を越える水路橋の橋台の破損、水路側面のひび割れ、底面の破損など改修が必要とされる箇所が至るところに出てきております。このような状況に対応するため、計画的に改修を進めてきてはありますが、国の農業農村整備事業の予算の大幅削減により、今後、新規・継続とも事業の計画すら立たないという状況であります。来年度は、今年度のように前年度の繰越予算や新設された農山漁村地域整備交付金の増額も見込めないことから、さらなる方針転換が迫られることになります。

そこで、土地改良を取り巻く環境は非常に厳しい状況ではあり

ますが、東播磨、北播磨を中心とする疏水関連施設、ため池、田園風景を我が兵庫県の世界に誇る農業、文化的施設として、一体的に整備、保存し、次の世代に良好な状態で引き継いでいくことが必要であると考えますが、県としては、現在進捗中の事業も含め、この現状に対してどのように対処していかれるのかご所見をお伺いいたします。

2. 平成24年度予算特別委員会（関係部分）

（第7日 3月8日）

北播磨の夢推進事業の中で、「東条川疎水ネットワーク博物館構想」が進められている。これはやはり、ぜひとも成功させなければいけないと思っている。戦後初の国営ダムとして鴨川ダムが作られ、水路が張り巡らされ、食料が増産された。そしてそのダムと川とため池と田んぼを水路で結ぶ、非常に壮大なる私たちの先人の血と汗の努力であった。それをしっかりと私たちは子供たちにも伝え、そして都市部の県民の皆さんにもその価値を知っていただいて一緒に守っていく気運が今回の事業で盛り上がってくればと思っている。今後の取り組みを期待しているので、ぜひともよろしく願います。

3. 平成26年12月 第325回定例会（関係部分）

（第3日 12月8日）

次は、東条川疎水ネットワーク博物館構想の推進についてであります。

平成22年の7月、県公館において「疎水フォーラムinひょうご2010」が開かれました。疎水という言葉に新鮮さを感じながら、

共生文化としての疏水、歴史・伝統の継承や原風景としての疏水など、疏水が持つ広く深い内容について認識を新たにするとともに、ふだん農業用水施設としてのみ認識していた用水路が、農業者だけではなく、地域・県民共有の地域資源、歴史・産業・文化遺産としての価値を持つことに強く気づかされました。

とりわけ、兵庫教育大学の南埜猛教授の「疏水とため池の取り合わせは、世界的に見ても珍しい水利システムである」、「この水利システムがなければ、この地域は豊かな水の恩恵を受けることはできない」との指摘には、私たち自身がもっとその価値を知り、維持管理とともに、疏水が持つストーリーを子供たちにも伝えていくことが、過去と現在、そして未来をつないでいくという私たちに課せられた大切な使命でもあると共感しております。

兵庫県には、淡山疏水、東播用水、東条川用水の三つが、全国疏水百選に選ばれています。中でも、淡山疏水は、本年9月に韓国で開催された国際かんがい排水委員会において、かんがい施設遺産に登録をされました。平成20年には、経済産業省の近代化産業遺産としても認定されており、その先進的な技術とともに、疏水とため池のネットワークが形成する文化的景観の歴史的・文化的価値が高く評価されています。

このように、疏水への注目、関心が高まるということは、降水量が少なく、昔から水不足に苦しんできた播磨や淡路などの豊かな農業地域を潤している約3万8,000を超えるため池と、血管のように水田を結ぶ用水路などの農業水利施設の重要性への気づきと、その水のネットワークが育んできた地域の歴史、文化の価値を見詰め直す好機会を生んでいると言えるのではないのでしょうか。

知事は、9月定例会において、ため池の保全、防災、多面的機

能の活用など総合的に対応する観点から、「ため池の保全に関する条例」の改正を検討すると表明されましたが、疏水についても、ため池と同様に、多面的機能に着目し、総合的に活用していくべきではないでしょうか。

今日、この水の恵みにより、北播磨は兵庫県を代表する豊かな農業地域として、また、酒米山田錦の産地としての変貌を遂げてきました。特に、東条川の谷を渡る曾根サイフォンは、全長1,087メートルにも及ぶ日本最長クラスの規模のサイフォンであり、また丘陵と丘陵を結ぶ世界的にも珍しい施設でもあり、その景観は圧巻であります。しかし、用水路などの施設は老朽化が進み、地元では管理に大変な苦勞をされていると聞いています。

北播磨県民局では、施設の保全と併せて、平成24年3月に東条川疏水ネットワーク博物館構想を策定し、地域全体でこの東条川疏水について学び、地域の財産として生かし、地域の手で次世代につないでいくことを目的に掲げて、事業に取り組んでおられます。北播磨の持つ自然と産業、歴史、文化の価値を人と水のネットワークでつなぎ、地方創生につなげていこうとする疏水ネットワーク博物館事業の今後の展開と、全国一のため池王国であり、世界的にも珍しい水利システムを誇る兵庫の資源を生かした地域活性化の取り組みについて、お伺いをいたします。



◆著者紹介

藤本百男 ふじもと ひゃくお

- 昭和28年10月31日 兵庫県加東郡社町社生（現加東市社）
- 兵庫県立社高等学校、早稲田大学法学部卒業
- （国公立学校教員）兵庫教育大学附属小学校、同附属中学校教諭（社会科）
兵庫県加古川市立小学校、滝野町立滝野東小学校教諭
- 神戸商科大学・兵庫県立大学非常勤講師（兼職）
- 兵庫教育大学大学院修士課程修了（教育学修士）
- 社町史編纂委員
- 平成19年4月 兵庫県議会議員初当選
平成23年4月 同 2回目当選
自民党県議団副政調会長、副幹事長、文教部会長
健康福祉常任委員長
- 加東軟式野球協会会長、兵庫県釣針協同組合顧問等

県政資料 ふるさと加東の歴史再発見シリーズ I

東条川疎水ネットワーク博物館関係

発行日 平成27年3月吉日

著者 兵庫県議会議員 藤本百男

発行所 藤本百男事務所

〒673-1431 兵庫県加東市社1491-1

TEL(0795)43-8270 FAX(0795)27-7221

印刷所 株式会社吉本宝文堂

〒675-1343 兵庫県小野市来住町883-2

TEL(0794)63-4011 FAX(0794)62-5252

非売品